

調	査
報	告

# 架橋離島と小規模離島のいま①

長崎県松浦の島々

改正離島振興法の第三条離島振興基本方針に「橋梁の整備」が明記された。また、衆参両院の国土交通委員会において「架橋整備後、地域の実情に配慮しつつ、離島地域指定が直ちに解除されないよう指定解除基準を検討すること」が附帯決議され、二〇二三年五月二四日に開催された第二二回国土審議会離島振興対策分科会にて、離島指定解除のあり方などについて協議がなされたところである。

本財団では、上述の改正内容に対し、「架橋島（指定解除された島）」の現況や課題を把握する現地調査を実施している。本誌では四六号（一九六五年）と九九号（七九年）にて、「離島に橋を架ける」という特集を組み、架橋促進活動の状況、架橋への期待と不安をさまざまな視点からまとめてきたが、今号より複数回にわたり「橋が架かった島」の現状について調査結果を報告していく。

また、改正法で新設された「小規模離島への配慮」（第十七条の六）に対しても、人口規模の小さい島々の実態調査を実施しており、その結果も合わせて報告していきたい。

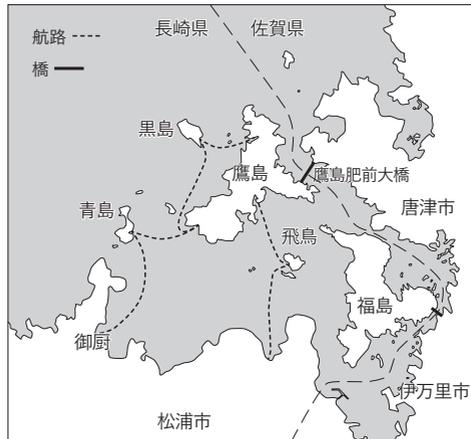
※離島振興法の改正の詳細については前号二七三号参照。

## 青島——コロナ禍を経た青島あおしまる○

長崎県松浦市の法指定離島は青島（二〇五人、二〇二〇年国調）、黒島（六三人）、飛島（四四人）の三島である。いず

れも、鷹島たかしま（架橋島）と松浦本土を結ぶ鷹島汽船の航路が寄港する。

青島では住民全員を社員とする「一般社団法人青島〇」が水産物の販売、加工品の製造販売に取り組んでいる。現



在、中心となって活動する辻山新悟代表理事は、陸上自衛隊を定年退職後、一〇年ほど前に故郷・青島に戻ってきて、岩牡蠣養殖に従事しつつ、青島〇の設立・運営に携わってきた。

本誌編集部



辻山新悟さん。青島〇の加工場前で。

「魚の量や種類が減ってきました。低価格魚の活用や販路開拓を進める必要があります。例えばタカノハダイという魚はみりん干しにしています」

二〇二一年三月には船客待合所で惣菜や水産加工品の無人販売を始めた。冷蔵ケースには、刺し身やワカメ、煮物やサラダまで並ぶ。ターゲットは来島者に加え島の人たちで、買い物支援の側面もある。通常、魚は譲り合う（お

裾分け）関係にあるというが、自宅で捌く手間、少量消費のニーズから無人販売を利用する住民も多く、二二年度の売上は約五六万円、青島〇の収入は三七万円ほどになった。

「人数は多くないですがUターンの若者もいて、青島〇の理事も務めるなど新たな担い手として頑張ってくれています。まだ青島〇だけで賃金を払えるほどではありませんが、雇用を生み出して島に人を呼べるよう頑張りたい」

青島は修学旅行などでの体験民泊の受け入れが盛んだった（本誌二五六号参照）が、人手不足にコロナの影響が重なり、二〇年以降は受け入れが止まっていた。しかし、今年五月以降、八ヶ九校ほどの受け入れが決まっており、交

流再開に向けた体制が整いつつある。

島内の市立青島小中学校には中学生二名、小学生八名が通う。島を訪れた日、静かな港には、生後間もない赤ん坊の声も響いていた。

### 鷹島肥前大橋——島の生活圏が一変

鷹島に橋（鷹島肥前大橋）が架かったのは二〇〇九年。結ばれた先は佐賀県唐津市肥前町である。県境をまたぐ離島架橋は、ここと松浦市福島、佐賀県伊万里市のほか、本四連絡橋を除けば、広島県大崎下島（呉市）と愛媛県岡村島（今治市）のみで、大変めずらしい。

架橋により鷹島住民の生活圏には大きな変化が生じた。国勢調査によると、

鷹島肥前大橋に関する年表

一九九七年 国庫補助事業認定、事業開始

二〇〇六年一月 鷹島町が松浦市・北松浦郡福島町と合併し、松浦市に

二〇〇九年四月 鷹島肥前大橋開通（通行料無料）

二〇一一年四月 離島振興法に基づく離島指定解除



鷹島の道の駅「鷹ら島」から鷹島肥前大橋を望む。松浦は「アジフライの聖地」として友田吉泰市長がトップセールスを行なっており、アジフライ目当ての来島者も多い。

架橋前の二〇〇五年には一パーセントだった他県への就業者・通学者が、二〇年には一五パーセントとなっている。鷹島支所（旧鷹島町役場）から唐津市役所まで車で四〇分、松浦市役所本庁までは、唐津市と伊万里市を経由して一時間かかる状況にある。博多中心部か

らも車で約一時間半の好アクセスとなつた鷹島の取り組みを取材した。

### 分娩間隔日本一の繁殖農家

かつて鷹島には広範囲に葉タバコ畑が広がっていたが、作付け廃止農家の募集（廃作協力金）もあって、辞めた区域も多い。現在の農業は畜産と葉タバコ、露地栽培が

中心で、肉用牛の繁殖農家が二三戸ある。そのうち大石啓介さん・恵子さん夫妻は、島内にいる約六〇〇頭のうち五〇〇頭ほどの母牛を人工授精させて仔牛を産ませ、約九カ月育て、市場を通じて全国の肥育農家のもとへと売る繁殖農家で「令和三年度ながさき農林業大賞（農林水産大臣賞及び長崎県知事賞）」を受賞するなど注目を集めている。

鷹島生まれの啓介さんは島の中学校卒業後、諫早農業高校、県立農業大学校を出て、島外の会社に勤めていた。二〇〇三年、二六歳の時に地元の後輩から「島で若手が頑張っている。いつになったら戻ってくるんですか」と言われ、帰ることを決意。葉タバコと畜産をしていた父親から、畜産を引き継ぐ形でUターンした。

架橋の効果について啓介さんは、「エサである輸入牧草の調達がしやすくなりました。いつでも購入できるという安心感もあります」と語る。フェリーでの海上輸送コストが削減されたのは、さることながら、架橋によってエサを取り扱う商社の営業も頻繁に来るようになった。さらに、佐賀県の農家との交流が盛んになり、情報交換や研修の機会が増えたという。島の畜産が盛んになり、母牛の頭数が増えてきたことから、長崎市出身の恵子さんは農業未経験ながらも家畜人工授精師の資格を

取得した。

仔牛は、橋を介さずに市場に出荷される。平戸市田平たびらにある「丁Aながさき西海平戸中央家畜市場」が主な出



大石啓介さん・恵子さん夫妻。

荷先で、月に一回、鷹島の南西、船倉津港から本土の御厨港まで鷹島汽船のフェリーが「セリ市牛積み車」(四トン車、三トン車を使用)を運んでいる。あくまで合理的な輸送ルートが

選ばれているのである。

また、恵子さんは、架橋前のことを「船の運航に合わせて、時間に迫られる生活でした。また、子どもが病気がちだったので、架橋によって(佐賀県を含む)医療機関が選べるようになったことが大きな変化だった」と振り返っていた。

### 養殖漁業の生産拠点

漁業面では、新松浦漁業協同組合の本所が鷹島町阿翁浦あうらうに置かれている。同漁協はトラフグの養殖生産日本一。「鷹ふく」ブランドで、

九州各地から関西・関東まで広く出荷している。このほか二〇〇八年には、エサの買い付けや製品出荷の条件が揃っていること、サバの日本有数の水揚げを誇る松浦魚市場に近接するなど養殖漁業の生産拠点としての鷹島の利点に着目し、本マグロ養殖の専門メーカー「双日ツナファーム鷹島(株)」が設立された。現在は四万尾ほどが飼育されている。

以上のように架橋による着実な産業振興が図られている一方、課題はやはり人材不足である。長崎県の求人を探している人に、鷹島は「遠く離れた場所」との印象を持たれてしまうことが多いという。特にハローワークの求人案内では、まず都道府県を選択してから個票を見る手順を踏むため、その傾向が強い。そこで、交通のアクセスがよい唐津市での求人对応の際に、鷹島の求人を紹介してもらうといった工夫を講じている。

## 車で行ける島キャンプ場

「キャンプが好きで、運営できる場所を探して鷹島にたどり着きました」

こう話すのは、鷹島北部でキャンプ場「ととcho・ん・トコ」を運営する松本弘二さん。陸上自衛隊を定年退職したあと、鷹島でのキャンプ場継承に目処が立ったため、二〇二二年四月に福岡県北九州市から移住し開業した。義父が鷹島出身で、墓参りなどの機会に架橋前の鷹島に船で渡った経験があるという。

「北九州を夜中に出て、唐津市星賀ほしかに車中泊、フェリーで鷹島に渡ってもう一泊していました。橋が架かる前は島に行くのが一苦労ではありましたが、その分島に泊まることも多かった。架かって利便性が上がった一方で、日帰りすることも増えました」

架橋によって島内宿泊需要が減ることとは予想できるが、キャンプ場経営と

いう観点からいうと、別の側面もある。鷹島までは福岡市内から車で約一時間

半。利用者はテントやイスなどキャンプ用品を車に積んで、夕方までにキャンプ場に直接乗り入れ、簡単な食事やアルコールとともに眼前の水平線に落ちる夕陽や夜空を楽しみ、一泊して翌朝帰っていく。

「最近流行っている『ソログルキャン』のお客さんが多いですね」

ソログルキャンとは、寝床は一人ずつで確保しつつ、食事や焚き火は一緒に過ごすというキャンプスタイル。アクセスや立地の良さ、こじんまりとした規模感からリピーターも増えてきているという。

現在、松本さんは、妻、中学二年生から六歳までの四人の子どもたち、実母と一緒に鷹島で暮らしており、キャンプ場経営に加え、午前中は鷹島肥前大橋近くの道の駅「鷹ら島じま」で魚加工の仕事に従事している。キャンプ場も

繁盛していて、なかなか休みが取れない日々を送っている。

「第二、第三のキャンプ場を開きたいです。目の前の黒島もとても良い場所なのですが、今のキャンパーは車移動がメイン。船で渡らないといけないのがネックです」

松本さんは、忙しくも今の暮らしに満足だという。

## 元寇を観光コンテンツに

二〇一二年、鷹島南岸東部の「鷹島神崎遺跡こうざき」が日本の海底遺跡として初の国史跡となった。蒙古襲来（元寇）に関する古戦場で、一二八一年の弘安の役で総勢四四〇〇隻の船と一四万人ともいわれる元軍の大半が海底に沈んだとされる場所である。松浦市立埋蔵文化財センターでは、周辺海域で発見された元寇遺物の脱塩・保存処理などの作業が行なわれており、隣接するガイダンス施設には元寇資料、考古資料な

どが展示されている。  
他の地域にはない魅力を有する施設  
ながらも、橋が開通した二〇〇九年度  
には一時的に来場者は五万人を超えた



松本弘二さん。鷹島と背後の黒島の両島で旧鷹島町を構成していた。

が、一七年度以降は三千人前後で推移。  
来館者を増やすためのセンターの魅力  
の周知などに努めている。そんな中、松  
浦市文化観光課では「元寇（蒙古襲来）  
を活かした食と歴史の観光

コンテンツ造成事業アクシ  
ョンプラン」を二二年度に  
策定。同年度からの三カ年  
で魅力の発信、観光コンテ  
ンツの整備に取り組んでい  
る。

歴史に対する関心から遠  
い若者には、まず「知って  
もらおう」ため、広報冊子  
『meetsーまじら』制作やス  
タンプリリーなどを実施。  
食の魅力などを通じてすで  
に鷹島に来ている層には、  
島の違う側面に「気づいて  
もらおう」ことを目指してい  
る。

また、歴史への関心が高

い層に対しては、さらなる理解を「深  
めてもらう」ため、二〇二〇年に鷹島  
神崎遺跡の海底に沈む木製いかりを引  
き揚げる「元寇のタイムカプセル引き  
揚げプロジェクト」をクラウドファン  
ディングで実施したところ、一一〇〇  
万円を超える支援が集まり、現地ツア  
ーにも多くの参加があった。センター  
では、引き続き情報発信を行なうとと  
もに、今後は市民向けモニターツアー、  
ガイドマニユアルの制作といった取り  
組みが、効果的なアプローチにつなが  
るものと期待される。

◆  
本土との常時交通が確保されて鷹島  
は「離島」ではなくなった。しかし、青  
島と同様に周囲を海に囲まれ、「島」ら  
しさは損なわれておらず、むしろそれ  
を生かした地域づくりが実践されてい  
た。規模の大小はありつつも、産業を  
軸にさまざまな挑戦を続ける松浦の  
島々の未来が楽しみだ。

(佐伯)